

## 資料

聴覚障害学生のコミュニケーション手段の使用状況とその満足度に関する研究  
—主に使用するコミュニケーション手段の違いによる検討—

三枝 里江\*・鄭 仁豪\*\*

本研究では、聴覚障害学生68名を対象にコミュニケーション手段の使用状況とその満足度、満足度が損われる要因について検討した。対象者は、主なコミュニケーション手段により、口話優位群と手話優位群に分けられた。その結果、コミュニケーション手段の使用状況では、口話優位群は、手話ができる聴者に対しても口話を使用する一方で、手話優位群は手話ができる相手には手話を、手話ができない相手には筆談を使用することが示された。満足度においては、手話優位群は、手話ができる相手に対して満足度が高く、口話優位群も手話ができる聴覚障害者の友人や教職員に対して満足度が高かった。満足度が損われる要因は、「内容理解」、「手段」、「障害理解」、「心理的負荷」の4つに分類され、口話優位群も手話優位群も、「内容理解」における伝達面の困難さが満足度に影響を及ぼしていることが示された。

キー・ワード：聴覚障害学生 コミュニケーション手段 満足度

## I. 問題の所在と目的

1993年、「聴覚障害者のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告」において手話の活用が検討されたことをきっかけに(中野, 1993)、学校教育現場におけるコミュニケーション手段を口話のみの使用から手話を併用する手段へと変更している特別支援学校(聴覚障害)(以下、ろう学校)も増加している(波多野, 2013)。学校内で手話を使うことによって、コミュニケーションをする相手の範囲が広がり、コミュニケーションの内容が豊富になったこと(我妻, 2008a)や、内容が理解しやすくなったことが報告されており(我妻, 2008b)、手話併用の有効性が示されている。米国の聴覚障害教育においても、2011年に行われた調査によると、ろう学校におけるコミュニケーシ

ン手段としては、口話のみの使用(51.8%)、手話と口話の併用(15.5%)、手話のみの使用(15.2%)、シムコム(13.3%)が挙げられており(GRI, 2013)、日本同様に教育に使われているコミュニケーションモードが多様化している(我妻, 2014)。

聴覚障害者のコミュニケーション手段は、口話、手話、筆談などがあり、用いられる生育環境や発生時期、教育歴、聴力レベルによってコミュニケーション手段の選択はひとりひとり異なる(中澤, 2005)。そのため、コミュニケーション相手の聴覚障害の有無、言語能力に合わせた対応が必要とされる。聴覚障害者が聴者と円滑なコミュニケーションを行うには、様々なコミュニケーション手段の獲得や相手に応じた使い分けが求められる。聴覚障害者が相手に応じて、どのような手段を用いているのか、その実態を検討し、聴覚障害者と聴者が円滑なコミュニケーションがとれる環境を考察することは必

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

\*\* 筑波大学人間系

要であると考える。

これまでに聴覚障害者のコミュニケーションに関する研究はいくつか進められてきた。ろう学校出身者、及び在籍者を対象とした先行研究においては、聴覚障害者は、相手によって異なるコミュニケーション手段を使用し、聴覚障害者同士のコミュニケーションにおいて、満足度が高いこと（福田・森本・四日市，1994）、種々の言語媒体を自分自身の使用能力と相手の理解能力に応じて使い分けられていることが報告されている（上久保・比企・福田，1997）。また、聴覚障害者は、コミュニケーションの表出、理解に関して不都合を感じない相手とのコミュニケーションに対して満足度が高いこと（岩田，2003）、聴覚障害者同士ではほとんどの人が手話を使用しているが、職場や家では半数以上が聴者に対して口話を使用していること（Kaplan & Brandt, 1991）、加えて、早期から聴覚の活用を行った聴覚障害者を対象とした先行研究では、聴覚障害者は、相手や目的に合わせてコミュニケーション手段を使い分けしており、複数の手段を併用する率は表出時より受信時の方が高いこと（中村，2006）が明らかにされている。

これらの先行研究では、聴覚障害者は相手によって異なるコミュニケーション手段を用いていること、聴覚障害者同士のコミュニケーションにおいて満足度が高いことや手話が有効であること、コミュニケーション手段に対する相手の理解能力と自分の使用能力を見極めているといった実態が明らかにされている。しかしながら、聴覚障害者が相手に応じて、どのようなコミュニケーション手段を用い使い分けしているのか、また、その際の満足度はどのようなものなのかに関する詳細は報告されていない。聴覚障害者が自らに適したコミュニケーション手段をいかに用いているのか、聴覚障害者がどのような場面でコミュニケーションに対する満足や不満を感じているのか、それらの要因を明らかにすることは、コミュニケーション環境を整備していくうえで、重要である。

近年、高等教育機関（以下、大学）に進学す

る聴覚障害者が増えており、合理的配慮がなされた環境で、聴覚障害学生が相手に応じてどのようにコミュニケーション手段を用い、使い分けしているのか、また相手ごとのコミュニケーション満足度とその満足度の構成要素として何が挙げられるのかを明らかにすることは、多様なあり方を認め合える共生社会の実現に向けて重要な知見となるであろう。

そこで本研究では、大学に在籍している聴覚障害大学生・大学院生を対象に、コミュニケーション手段の使用状況とその満足度、及び満足度が損われる要因の構成要素を明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

関東圏・関西圏・東北圏に在籍する聴覚障害大学生・大学院生72名を対象とした。

### 2. 調査方法

質問紙調査を行った。全国ろう学生懇談会などの機会を活用し、研究協力の同意を得た後、筆者、および筆者の友人により配付、その場で回収した。

### 3. 調査実施期間

2015年7月末～10月末であった。

### 4. 調査内容

先行研究（福田ら，1994；上久保ら，1997）を参考に質問紙を作成した。①個人の属性：性別、聴力レベル、手話歴について回答を求めた。群分けを行うために、主に使用するコミュニケーション手段（口話か手話のいずれか1つの選択）、日常的に使うコミュニケーション手段（口話、日本手話、中間手話、対应手話、指文字、筆談、身振り、キューサインの中から使う順番に3つを選択）について回答を求めた。②コミュニケーション手段の使用状況：コミュニケーション相手として、家族、聴覚障害の友人、聴者の友人、初対面の聴覚障害者、初対面の聴者、教職員の6つを設定した。さらにその相手は、手話ができる相手と手話ができない相手（手話可・不可）の2つを設定した。コミュニ

ケーション手段の選択肢として口話、手話（日本手話、中間手話、対应手話）、指文字、筆談、身振り、キューサイン、その他の計9種類を設定し、実際に使用する手段、全てを選択してもらった。③コミュニケーション満足度：満足度の定義を伝達と受容の度合いとし、満足度を、0%（全く満足していない）～100%（大いに満足）の範囲で数値による回答を求めた。その際、満足度が100%に満たない（損われる）場合はその理由について記述を求めた。

## 5. 分析の内容

①フェイスシートの「主に使用するコミュニケーション手段」と「日常的によく使うコミュニケーション手段」の回答を基に口話優位群と手話優位群の2群に分けた。②コミュニケーション手段の使用状況に関しては、口話優位群、手話優位群それぞれ複数回答による集計を行い、その特徴を検討した。③コミュニケーション満足度に関しては、コミュニケーション相手、及び手話ができる相手と手話ができない相手（手話可、手話不可）の違いによって満足度の得点に差があるかどうかを検討した。④満足度が損われる要因に関しては、ラベルの意味の類似性に基づいて、カテゴリー化し、満足度が損われる要因を検討した。なお、分類の妥当性を確保するため、筆者を含めた大学院生3名によって合議・決定した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の審査・承認を受けて実施した（筑27-41）。

## Ⅲ. 結果

本研究では、72名の対象者全員から質問紙を回収した。72名の回答のうち、重複回答をした4名を除外とした。その結果、有効調査対象者は68名（口話優位群39名、手話優位群29名）となった。対象者の属性をTable 1に示した。

### 1. コミュニケーション手段の使用状況について

口話優位群のコミュニケーション手段の使用状況のクロス表をTable 2に示した。口話優位

群では、手話ができる相手に対して、「口話」の選択が最も多く、聴者の友人には97.3%、家族には96.9%、教職員には94.7%、初対面の聴者には94.6%が選択していた。次いで「対应手話」が選択され、聴覚障害の友人には76.9%、初対面の聴覚障害者には74.4%が選択していた。手話ができない相手に対しては「口話」の選択が最も多く、家族・聴者の友人には100%、初対面の聴者・教職員には97.4%、聴覚障害の友人には94.6%、初対面の聴覚障害者には92.3%が選択していた。

手話優位群のコミュニケーション手段の使用状況のクロス表をTable 3に示した。手話優位群では、手話ができる相手に対して、「対应手話」の選択が最も多く、初対面の聴覚障害者には86.2%、聴覚障害の友人には79.3%、教職員には75.9%、家族には74.1%が選択していた。手話ができない相手に対しては「筆談」の選択が最も多く、聴者の友人には96.6%、初対面の聴者・教職員には93.1%、初対面の聴覚障害者には82.8%が選択していた。

### 2. コミュニケーション満足度について

コミュニケーション満足度の分析結果をTable 4に示した。6つの相手に対して、満足度の得点の違いを検討するためにKruskal-wallis検定を行った。その結果、全ての相手において有意差がみられた ( $p < .05$ )。さらに相手の状況による満足度の得点の違いを検討するためにMann-whitney検定を用いた。その際、検定の多重性を避けるためにBonferroniの修正を行った結果、口話優位群・手話可と口話優位群・手話不可において、聴覚障害の友人、先生の間有意差がみられ、口話優位群・手話可の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。口話優位群・手話可と手話優位群・手話不可において、全ての相手の間に有意差がみられ、口話優位群・手話可の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。口話優位群・手話不可と手話優位群・手話可において聴覚障害の友人の間有意差がみられ、手話優位群・手話可の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。口話優位群・手話不可と手話優位群・手話不可において、聴

Table 1 対象者の属性

	年齢(歳)	聴力レベル(dB)	手話歴(年)
口話優位群	21.2 (2.0)	94.7 (14.2)	6.5 (4.3)
手話優位群	20.6 (1.7)	102.3 (5.5)	13.2 (5.4)

(注) 数字はM(SD)

Table 2 コミュニケーション手段の使用状況(口話優位群)

	N	口話	手話	日本手話	中間手話	対応手話	指文字	筆談	身振り	キュー	その他
家族	32	96.9	37.5	3.1	6.3	37.5	31.3	15.6	21.9	3.1	3.1
	39	100	2.6	0	0	2.6	5.1	30.8	17.9	0	0
聴覚障害の友人	39	69.2	71.8	25.6	30.8	76.9	69.2	17.9	28.2	0	0
	37	94.6	16.2	2.7	2.7	10.8	13.5	78.4	48.6	0	2.7
聴者の友人	37	97.3	54.1	5.4	13.5	48.6	24.3	35.1	32.4	0	0
	39	100	2.6	0	2.6	5.1	5.1	66.7	38.5	0	2.6
初対面の聴覚障害者	39	64.1	79.5	17.9	30.8	74.4	56.4	33.3	23.1	0	0
	39	92.3	15.4	5.1	5.1	15.4	15.4	82.1	46.2	0	0
初対面の聴者	37	94.6	37.8	2.7	8.1	35.1	18.9	48.6	27.0	0	0
	38	97.4	0	0	0	0	2.6	71.1	31.6	0	0
教職員	38	94.7	47.4	7.9	7.9	52.6	15.8	31.6	23.7	0	2.6
	38	97.4	0	0	0	0	0	65.8	31.6	0	2.6

(注1) 数字は%

(注2) 上段は手話ができる人に対する回答、下段は手話ができない人に対する回答

Table 3 コミュニケーション手段の使用状況(手話優位群)

	N	口話	手話	日本手話	中間手話	対応手話	指文字	筆談	身振り	キュー	その他
家族	27	59.3	55.6	29.6	29.6	74.1	77.8	18.5	37.0	18.5	3.7
	25	76.0	4.0	4.0	0.0	8.0	24.0	56.0	52.0	8.0	4.0
聴覚障害の友人	29	27.6	51.7	51.7	41.4	79.3	72.4	17.2	34.5	17.2	3.4
	29	58.6	27.6	0.0	0.0	27.6	41.4	86.2	69.0	3.4	0.0
聴者の友人	29	69.0	55.2	13.8	31.0	65.5	55.2	51.7	37.9	3.4	3.4
	29	65.5	10.3	0.0	0.0	10.3	17.2	96.6	62.1	3.4	3.4
初対面の聴覚障害者	29	41.4	62.1	27.6	37.9	86.2	62.1	13.8	31.0	3.4	0.0
	29	51.7	27.6	0.0	0.0	27.6	27.6	82.8	55.2	3.4	0.0
初対面の聴者	29	65.5	51.7	13.8	27.6	69.0	48.3	65.5	31.0	3.4	0.0
	29	62.1	10.3	0.0	0.0	10.3	6.9	93.1	58.6	3.4	0.0
教職員	29	69.0	65.5	13.8	24.1	75.9	41.4	48.3	20.7	3.4	0.0
	29	65.5	17.2	0.0	3.4	13.8	10.3	93.1	51.7	6.9	0.0

(注1) 数字は%

(注2) 上段は手話ができる人に対する回答、下段は手話ができない人に対する回答

者の友人の間に有意差がみられ、口話優位群・手話不可の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。手話優位群・手話可と手話優位群・手話不可において、全ての相手の間に有意差がみられ、手話優位群・手話可の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。

### 3. コミュニケーション満足度が損われる要因について

質問紙に記述された満足度が100%に満たない(損われる)理由における設問で得られた回答は、類似性に基づいて「伝達面の困難さ」、

Table 4 コミュニケーション満足度の分析結果

場面と状況		N	平均ランク	有意差	
家族	口話優位群	手話可	32	71.1	**
		手話不可	39	61.4	
	手話優位群	手話可	27	73.2	
		手話不可	25	39.3	
聴覚障害者の友人	口話優位群	手話可	39	81.8	**
		手話不可	37	53.1	
	手話優位群	手話可	29	92.0	
		手話不可	29	42.1	
聴者の友人	口話優位群	手話可	37	82.8	**
		手話不可	39	63.4	
	手話優位群	手話可	28	80.8	
		手話不可	29	38.4	
初対面の聴覚障害者	口話優位群	手話可	39	84.2	**
		手話不可	39	62.4	
	手話優位群	手話可	29	82.6	
		手話不可	29	41.5	
初対面の聴者	口話優位群	手話可	37	78.7	**
		手話不可	38	65.8	
	手話優位群	手話可	29	75.7	
		手話不可	29	44.9	
教職員	口話優位群	手話可	38	85.2	**
		手話不可	38	61.4	
	手話優位群	手話可	29	77.5	
		手話不可	29	42.3	

(注1) \* $p < .05$ , (Kruskal-wallisの検定)

(注2) \*\* $p < .01$  (Bonferroniの修正によるMann-whitneyの検定)

「理解の困難さ」、「手段の限界」、「相手の特徴」、「障害理解」、「心理的負荷」の6個の小カテゴリーに分類された。さらに、『内容理解』、『手段』、『障害理解』、『心理的負荷』の4個の大カテゴリーに分類し、満足度が損われる要因の構成要素が示された。

本文中では、『』は大カテゴリー、「」は小カテゴリー、〔〕はラベルを示している。口話優位群の満足度が損われる要因の分析結果をTable 5に、手話優位群の満足度が損われる要因の分析結果をTable 6に示した。

口話優位群において、満足度が損われる要因のカテゴリーで、合計件数が多かったのは、『内容理解』の〔読話の困難〕であった。〔読話の困難〕は、相手が手話ができるか否かに関わ

らず、全ての相手に対して挙げられていた。次に、〔手話の読み取りの困難〕であった。〔手話の読み取りの困難〕は、手話ができる全ての相手に対して挙げられていた。続いて、〔明瞭な発話の困難〕であった。〔明瞭な発話の困難〕は、手話ができない全ての相手、及び手話ができる聴者（友人・初対面）と教職員、いわゆる聴者に対して挙げられていた。

手話優位群において、満足度が損われる要因のカテゴリーで、合計件数が多かったのは、『内容理解』の〔明瞭な発話の困難〕であった。〔明瞭な発話の困難〕は、手話ができない全ての相手、及び手話ができる家族と聴者の友人に対して挙げられていた。次に『手段』の〔筆談の限界・困難〕であった。〔筆談の限界・困難〕は、

Table 5 満足度が損われる要因の分析結果（口話優位群）

大カテゴリー	小カテゴリー	ラベル	家族		友人（聴覚障害）		友人（聴者）		初対面（聴覚障害）		初対面（聴者）		教職員		合計件数
			手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	
内容理解	伝達面の困難さ	話法の困難	3	13	2	4	3	17	1	10	3	13	6	13	7
		手話の読み取りの困難	4		11		9		13		7		4		13
		明瞭な発音の困難		4		6	3	6		5	4	3	6	3	40
		手話の表出の困難			2		2		3		2		4		13
内容理解	理解の困難さ	時間がかかる				4				3				2	9
		内容がズレる													0
		宴会場面での会話	1	1						1					3
		情報量が少ない		1						2				1	4
手段	手段の限界	口話の限界・困難	1	1	1	4	1	1		2		1		1	13
		口話の自信のなさ													0
		手話を使って欲しい（頻度）	3	3		5	2		3		2		1		19
		日本手話を使って欲しい													0
		手話の技術不足（自分）				4	1		1						6
		手話の技術不足（相手）												1	1
		聴者の視界・困難		1		1		5		1	1	6		6	21
		相手の特徴	相手に合わせた手話の使用				1			2					3
聴覚理解	聴覚理解	聴覚障害者に対する理解がない										7	5	12	
		聞こえないことに対する理解がない					6			1		1		8	
心理的負荷	心理的負荷	気遣い・疲労感			2	2	2	1	2	6	1	4	2	22	
		あきらめ・もどかしさ				1				1				2	
		手話で話すことに慣れていない							2					4	
		関係構築のしにくさ								1				1	
合計件数			12	24	20	31	29	33	25	35	31	35	27	35	337

\*数字はカテゴリー数（件）

Table 6 満足度が損われる要因の分析結果（手話優位群）

大カテゴリー	小カテゴリー	ラベル	家族		友人（聴覚障害）		友人（聴者）		初対面（聴覚障害）		初対面（聴者）		教職員		合計件数	
			手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可	手話可	手話不可		
内容理解	伝達面の困難さ	話法の困難		4		2		2		1	1	2		2	14	
		手話の読み取りの困難	1		3		4		5		1		3		17	
		明瞭な発音の困難	1	6		4	1	6		3		3		3	7	
		手話の表出の困難	1		2		2		3		4		2		14	
内容理解	理解の困難さ	時間がかかる				4	2	2	1	2	1	2	1	2	17	
		内容がズレる	1				1							1	3	
		宴会場面での会話													0	
		情報量が少ない		4		2		2		2		1		2	13	
手段	手段の限界	口話の限界・困難													0	
		口話の自信のなさ		1		2	1	2		2		2	1	2	13	
		手話を使って欲しい（頻度）	1	1		3	1		4						10	
		日本手話を使って欲しい				3		3					2		11	
		手話の技術不足（自分）				1									1	
		手話の技術不足（相手）	2		1						3		2		8	
		聴者の視界・困難				5		4		4		2	5		4	21
		相手の特徴	相手に合わせた手話の使用							1				1		1
聴覚理解	聴覚理解	聴覚障害者に対する理解がない												0		
		聞こえないことに対する理解がない				1	1			1		1		4		
心理的負荷	心理的負荷	気遣い・疲労感			2	2	2	2	5	4	1	2	1	18		
		あきらめ・もどかしさ	1			1		1			2		2	7		
		手話で話すことに慣れていない													0	
		関係構築のしにくさ													0	
合計件数			8	16	10	23	18	23	17	20	20	21	17	20	213	

\*数字はカテゴリー数（件）

手話ができる初対面の聴者、及び手話ができない聴覚障害者（友人・初対面）、聴者（友人・初対面）、教職員に対して挙げられていた。続いて、『心理的負荷』の〔気遣い・疲労感〕であった。

〔気遣い・疲労感〕は、相手が、手話ができるか否かに関わらず、聴者（友人・初対面）と教職員、いわゆる聴者、及び手話ができる初対面の聴覚障害者に対して挙げられていた。

#### IV. 考察

##### 1. コミュニケーション手段の使用状況について

口話優位群においては、相手が手話ができるか否かに関わらず、家族、聴者の友人、初対面の聴者、教職員、すなわち聴者に対して90%以上の者が、口話を使用していることが示された。手話ができない聴覚障害者（友人、初対面）に対しても同様に90%以上の者が、口話を使用していることが示された。このことから、口話優位群のコミュニケーション手段は、口話を中心に使用している可能性があることが示唆された。さらに、手話ができる相手に対しては、対応手話の使用が多くみられるものの、手話は手話のみで使用されることはなく、他の手段とともに使用されていることから、手話が補助的な役割を果たしていると推測される。手話ができる初対面の聴者においては、手話ができない相手と同様に口話を中心に筆談、身振りを使用する傾向が示された。このことから、口話優位群は、中村（2006）の先行研究と同様に、口話を中心に相手や相手が使用するコミュニケーション手段に合わせて、補助手段を組み合わせ使用していることが考えられる。

手話優位群においては、手話ができる家族、聴覚障害の友人、初対面の聴覚障害者、初対面の聴者、教職員に対して、70%以上の者が対応手話を使用していることが示された。手話ができない聴覚障害の友人、聴者の友人、初対面の聴覚障害者、初対面の聴者、教職員に対しては、80%以上の者が筆談を使用していることが示された。このことから、手話優位群は、相手が、手話ができるか否かによって手段を選択している可能性があることが推測される。

##### 2. コミュニケーション満足度について

口話優位群においては、手話ができる聴覚障害の友人、教職員に対して満足度が有意に高いことが示された。先行研究では、コミュニケーション満足度は、手話使用の程度と関連していることが示唆されている（福田ら、1994）。本研究においても、手話ができる聴覚障害者同士の

コミュニケーションにおいては、手話の使用が多くみられ、相手の手話の使用の有無が満足度に影響を与えていると考えられる。一方、手話ができる教職員とのコミュニケーションにおいては、口話の使用が多くみられるものの手話が出来た相手に対する満足度が高く、手話使用の程度と満足度に関連があるとは言い難い結果であった。手話使用の程度以外に満足度を決定づける要因があると推測される。手話使用の程度以外の要因を特定することは、聴覚障害者と聴者とのコミュニケーションを円滑に行うための示唆が得られると考える。そのため、手話ができる教職員とのコミュニケーションについて更なる研究が必要である。

手話優位群においては、全ての相手に対して、手話ができるか否かによって満足度に差がみられた。このことは、手話優位群にとって、満足度を決定付けている要因が、共通するコミュニケーション手段、つまり手話であると推測される。

##### 3. コミュニケーションが損われる要因について

口話優位群においては、相手が手話ができるか否かに関わらず、全ての相手に対して、読話が困難であることが示された。次に、手話ができる全ての相手に対して、手話の読み取りも困難であることが示された。さらに手話ができない全ての相手に対して、明瞭な発話が困難であることが示された。聴覚障害者は入力障害であるという見方を示した先行研究（中村、2006）もあり、本研究においては、読話、及び手話を読み取ることと、明瞭な発話に困難を抱えている学生が存在している可能性が示された。また、聞き慣れない専門用語や固有名詞の読み取りは難しいことを示した先行研究（脇中、2009）もあり、専門性を学ぶ大学特有の結果であることも考えられる。

手話優位群においては、手話ができない全ての相手に対して、明瞭な発話が困難であることが示された。次に、家族以外の手話ができない相手に対して、筆談に限界・困難があることが

示され、手話優位群にとって、手話が重要であることが窺える。

## V. 結論と今後の課題

本研究では聴覚障害大学生が、相手に応じてどのようにコミュニケーション手段を使用し、その際の満足度はどのようなものなのか、満足度が損われる要因にはどのようなものがあるのかを検討した。

その結果から、主に口話を使う人々は、相手が手話ができるか否かに関わらず、口話を使用していることが示された。聴覚障害の友人、教職員に対しては、相手が手話ができるか否かによって、満足度に差がみられ、相手の手話の有無が満足度に影響を及ぼしていることが示唆された。読話、及び手話の読み取りの困難、明瞭な発話の困難である「伝達面」の困難さが、満足度が損われる要因であることが推測された。

他方、主に手話を使う人々は、手話ができる相手に対して手話、手話ができない相手に対しては筆談を使用していることが示された。相手が手話ができるか否かによって、満足度に差がみられ、相手の手話使用の有無が満足度に影響を及ぼしていることが示唆された。明瞭な発話の困難である「伝達面」の困難さが、満足度が損われる要因であることが推測された。

先行研究において、聴覚障害者は相手によって異なるコミュニケーション手段を用いていること、聴覚障害者同士のコミュニケーションにおいて満足度が高く、手話が有効であることが示されているが、本研究においては、聴覚障害者自らが使用するコミュニケーション手段によって、相手に使用するコミュニケーション手段も異なること、相手が手話ができるか否かによって満足度に違いがみられること、伝達面の困難さが満足度に影響を与えていることが明らかとなった。したがって、聴覚障害者とコミュニケーションを行う際には、聴覚障害の有無だけではなく、聴覚障害者がどのようなコミュニケーション手段を用いているのかによって、聴者側も、伝達面の工夫や配慮が求められている

と言えよう。コミュニケーションは、相互で行われるものでもある。今後は聴者側が、聴覚障害者に対してどのようなコミュニケーション手段を用いているのか、その際にどのような困難があるのか、その検討も必要であると考ええる。

今回、口話優位群と手話優位群の比較による検討を行うにあたり、「主に使用するコミュニケーション手段」と「日常的によく使うコミュニケーション手段」の回答を基に群分けを行った。しかし、「主に使用するコミュニケーション手段」の項目において、口話、手話の両方を選択する人もおり、今回は除外としたものの、口話・手話同等群などの群分けの検討も必要であったと考えられる。その点については、群分けの根拠を含め、今後検討していきたい。また、口話優位群において、手話ができる教職員との間のコミュニケーションでは、口話の使用が多く見られるものの満足度が高い結果であった。主に口話を使用する聴覚障害者にとって、聴者が使用する手話がどのような役割を果たしているのか更なる研究が必要であると考ええる。

## 文献

- 我妻敏博 (2008a) 聾学校における手話の使用状況に関する研究 (3). ろう教育科学, 50(2), 77-91.
- 我妻敏博 (2008b) 聾学校における手話使用に関するレポート. 上越教育大学.
- 我妻敏博 (2014) アメリカの聴覚障害児教育における言語モード. 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 20, 1-4.
- 福田友美子・森本行雄・四日市章 (1994) 聴覚障害者のコミュニケーション手段の使用に関する実態調査. *Audiology Japan*, 37, 229-235.
- Gallaudet Research Institute (2013) Regional and national summary report of data from the 2011-12 annual survey of deaf and hard of hearing children and youth. Washington, DC: GRI, Gallaudet University. [http://research.gallaudet.edu/Demographics/2012\\_National\\_Summary.pdf](http://research.gallaudet.edu/Demographics/2012_National_Summary.pdf) (2017年8月10日最終閲覧)
- 波多野雄一 (2013) 聴覚障害特別支援学校 (聾学校) で取り扱われる特徴的な自立活動の内容に関する調査 - 手話使用の広がり背景とした発音発語・指導に関する2002年調査結果 - . 特別支援



- 教育実践センター研究紀要, 11, 53-61.
- 岩田吉生 (2003) 聾学校高等部生徒における言語媒体の使用状況について－相手別の使い分けとその満足度に関する検討－. 愛知教育大学研究報告, 52 (教育科学編), 33-38.
- 上久保恵美子・比企静雄・福田友美子 (1997) 聴覚障害者による言語媒体の相手に応じた使い分け－口話・手話・筆談の使用傾向の男女による差異－. 特殊教育学研究, 35(1), 1-9.
- Kaplan, H., Bally, S. J., & Brandt, F. (1991). Communication self-assessment scale inventory for deaf adults. *J Am Acad Audiol*, 2(3), 164-82.
- 中村公枝 (2006) 早期より聴覚活用した重度聴覚障害者のコミュニケーションとその満足度 (特別発言). 音声言語医学, 47, 323-331.
- 中野善達 (1993) 聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告. ろう教育科学, 35(1), 7-42.
- 中澤操 (2005) 聴覚障害者のコミュニケーション手段. 総合リハビリテーション, 33(9), 803-807.
- 脇中起余子 (2009) 聴覚障害教育これまでとこれから－コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に. 北大路書房.
- 2017.8.24 受稿、2017.12.12 受理 ——

## The Usage of Communication Modes and Factors Affecting Degree of Satisfaction for Deaf Students: Analysis by the Difference of the Main Communication Mode

Satoe SAIGUSA\* and Inho CHUNG\*\*

In this study, the situation and satisfaction of deaf college student's communication modes and factors that reduce communication satisfaction were examined. The participants were divided into two groups. The oral group was 39 participants who used spoken language in their daily lives. The sign group was 29 participants who used sign language in their daily lives. The results indicated as follows; Firstly, in the oral group, they were using spoken language with hearing people who can use sign language, whereas in the sign group, the participants used sign language for people who can use sign language, and they used written language for those who cannot use sign language. Secondly, the sign group was able to gain the most satisfaction in communication from the partners who could use sign language. Also, the oral group was able to gain a high degree of satisfaction from friends and staff of a college who were able to use sign language. Thirdly, there are four imperfection factors: "understanding the contents", "lack of means", "understanding of deafness" and "psychological burdens", which are the factors that reduce communication satisfaction. It was suggested that deaf college students had difficulty in "understanding the contents", which had an effect on satisfaction.

**Key words:** deaf college students, communication mode, satisfaction

---

\* Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

\*\* Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba